

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 14 日現在

機関番号：15401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2009～2011

課題番号：21653051

研究課題名（和文） 幼老複合施設における高齢者と幼児の世代間交流の効果に関する研究

研究課題名（英文） The effects of intergenerational programs between young children and senior in the complex institute for welfare.

研究代表者

七木田 敦 (NANAKIDA ATSUSHI)

広島大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：60252821

研究成果の概要（和文）：

本研究は、幼児と高齢者の世代間交流を教育プログラムとして捉え、計画的で継続的な世代間交流が特に高齢者の主観的健康度、ひいては「生き甲斐感」、身体活動量にどのような影響を与えるのかを明らかにすることも目的に実施した。本研究を通して、高齢者と幼児との交流にはなんらかの意義があること、しかしイベント的な交流のみに偏っており保育者が日常的で自然な交流を望んでいること、その自然な交流が困難となっている原因には施設間の精神的な壁の存在が考えられること、が明白となった。

研究成果の概要（英文）：

Few people are willing to admit that senior adults and young children share many common characteristics, including: (1) changes in development; (2) need for companionship; and (3) the desire to be understood. These two groups are connected mostly through direct interaction with middle-aged adults. One very practical way to build a greater sense of community and reach people across the human age span--is to develop and become active in intergenerational programs. Intergenerational programming has been defined as the purposeful bringing together of different generations in ongoing mutually beneficial activities designed to achieve specified program goals. Intergenerational programs can successfully bridge the perceived generation gap between the young and the young at heart. These programs enhance the lives of both young children and senior adults by providing unique opportunities to celebrate diversity and develop more culturally conscious and sensitive citizens. How can early childhood leaders work for more caring communities? This article outlines the potential of building reciprocal relationships among the young and the young at heart.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	0	900,000
2010年度	1,100,000	0	1,100,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	240,000	3,040,000

研究分野：幼児教育学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：幼老複合施設 高齢者 幼児

1. 研究開始当初の背景

高齢化の進行のなかで、我が国では高齢者が安心して充実した老後生活を送ることができるよう、さまざまな福祉関連施設や介護サービスの整備などが早急に求められている。一方で、少子化も予想以上に進行し、子育て中の親が安心して子どもを育てられる社会的支援体制の充実や、子育て環境の整備や地域社会づくりも、重要な政策課題の1つである。これまでの福祉政策では、縦割りの行政システムの中で、これら高齢者福祉施策や子育て支援策が、それぞれ独立して進められてきた。しかし、近年ではこうした縦割りの垣根を超えて、高齢者福祉施策と子育て支援策を融合・連携する幼老施設の複合化が試みられてきている。この背景には、厳しい財政状況下での公共施設整備を、複数の施設を合築・併設したり、既存施設の一部を他施設に転用するという形で解決しようとする事情もある。「幼老複合施設」とは、保育園や児童館、小学校などの子ども用の施設と、老人ホームやデイサービスセンターなど的高齢者施設の合築・併設（を含む）事例を指す。行政の財政的事情で開始した幼老複合施設であるが、高齢者の心理や健康維持、あるいは幼児の社会性の発達などにとってプラスの側面があることが、実践者の報告によって述べられてきた。今後少子高齢化の影響を受けて、農村部を中心に既存の保育所を転用していくといった形態で増加していくと考えられる「幼老複合施設」であるが、その中で実施されている世代間交流の活動では経験的なものがほとんどで、より効果的でevidence based（実証的なデータに基づいた）な検討は国内のみならず海外においても皆無である。

2. 研究の目的

本研究は、幼児と高齢者の世代間交流を教育プログラムとして捉え、計画的で継続的な世代間交流が特に高齢者の主観的健康度、ひいては「生き甲斐感」、身体活動量にどのような影響を与えるのかを明らかにする。さらに認知症の予防・進行の緩和への効果についても踏み込む。またこれまで高齢者だけが一方的に効果があるとされてきた幼老複合施設での異世代間交流であるが、幼児においても、高齢者に対する福祉教育的意義や思いやり形成、あるいは自己抑制・コントロールの習得といった発達が促進されると考えられる。最終的には相互にプラスになるような効果的な方法やプログラムを提案する。

3. 研究の方法

研究計画と方法

(1) 研究計画と方法

<平成21年度>

① 老複合施設における異世代間交流の実態

調査

目的と方法：全国における幼老複合施設（164カ所）を対象にその異世代間交流の実態を明らかにすることを目的に調査を実施する。その際、施設・建築、実施形態、収容人数、担当者人数や日課などを調査し、異世代間交流の実施について質問用紙によるアンケート調査を行う。特に異世代間交流を行っていない施設においては、その理由や職員に対する意識調査も併せて実施する。

② 幼老複合施設視察訪問（北海道岩

見沢、室蘭、呉、東広島、福岡県中間市）先進的な異世代間交流を実施している幼老複合施設を視察訪問し、交流の実際を見学する。参加者（高齢者、幼児）、担当者に聞き取り調査を行う。

<平成22年度>

① 広島県呉市下蒲刈島幼老複合施設での異世代間交流の分析

目的と方法：実際行われている異世代間交流（月に1回）において、高齢者、幼児の参加による心理的、生理的効果を明らかにする。高齢者においては、生理的（日常生活運動量）、QOL、そして主観的健康度などの測定を行う。日常生活運動量の測定には、施設の同意を得て実施する。

また幼児においては、向社会的行動（思いやり）の獲得や福祉教育的な意義からの聞き取り調査を実施する。

② 幼老複合施設における効果的な異世代間交流モデルの提示

目的と方法：広島県呉市下蒲刈島幼老複合施設での異世代間交流の分析によって明らかになった効果的な交流方法のモデルを作成し、実施する。同様に高齢者においては、生理的（日常生活運動量）、QOL、そして主観的健康度などの測定を行う。

また幼児においては、向社会的行動（思いやり）の獲得や福祉教育的な意義からの聞き取り調査を実施する。加えて、参加者、交流担当者から聞き取り調査を行う。研究の担当：この作業には、七木田、上村、若林が当たる。

③ オーストリア・グラーツ市への訪問視察
目的と方法：オーストリアでは、自治体にとってサービスにかかるコストが低く押さえ高齢者施設や保険病院などの施設への入所をできるだけ遅らせるために高齢者施策として異世代間交流を実施している。グラーツ市での幼老複合施設での計画や実践の実態を訪問し明らかにした。

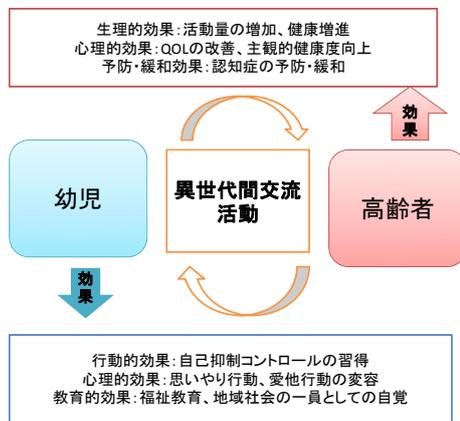
<平成23年度>

① 老複合施設における効果的な異世代間交流プログラムの評価

目的と方法：本研究で作成したプログラムの持続可能性を検討するために、一年間経過した後のフォローアップ研究を実施する。その際、同様に高齢者においては、生理的（日常生活運動量）、QOL、そして主観的健康度などの測定を行う。また幼児においては、自己抑制コントロールの評価、向社会的行動（思いやり）の獲得や福祉教育的な意義からの聞き取り調査を幼児自身に実施する。また幼児の変容については保護者からも聞き取り調査を実施する。加えて、参加者、交流担当者から聞き取り調査を行う。

②「幼老複合施設における異世代間交流」に関する研究シンポジウムの開催

目的と方法：本研究の成果の公表や広島県内、近隣県の関係者を対象に「幼老複合施設における異世代間交流」に関する研究シンポジウムを広島大学において実施する。



4. 研究成果

I・全国調査の結果から

(1) 施設開設の背景

複合施設開設の背景について、「開設された時期」は平成10年～15年の間に複合施設として誕生した施設が最も多かった。また、古くは、昭和46年より複合施設を開設している施設があった。「複合施設を開設するに至った目的」は、自園の理念や目的に合わせて複合施設へ転換した施設がある中で、地域特性や、行政からの子育て支援や高齢者福祉の要望に合わせて複合施設へ転換した施設も少なくなく、外部要因が転換に寄与している施設が見られた。また、「施設の目的について」は、ほとんどの複合施設が幼児と高齢者双方に対して共同活動の意義を考えていることが示された。

(2) 施設の形態

保育施設と高齢者施設の組み合わせの形態は、保育所とデイサービスの組み合わせ、続いて、保育所とグループホームの形態が多い結果となった。また、その他の組み合わせと

しても7形態が見られ、高齢者施設ではデイサービスを中心に保育施設と複合を行っている傾向が見られた。

(3) 異世代交流の実態

ほぼ毎日の頻度で世代間交流を行っている複合施設が多く、主に高齢者から幼児に対しては知識を生かした活動が見られる一方、幼児から高齢者に対しては、孫（家族）としての感覚を抱けるようなイベントが中心となっていることがうかがえる

(4) 異世代交流の効果と課題について
高齢者、幼児とも「情緒的安定」、「いきがい」、「安らぎ」といった効果が報告される一方で、活動時間帯の調整、身体機能・活動量の差、老幼の職員同士の交流の必要性、などが課題として示された。

II・観察調査

毎月の交流活動を観察した。一回の観察は2名～3名で行われた。記録は施設側の許可をもらい、ビデオカメラ、デジタルカメラ、メモによって行った。

○高齢者に関する調査

QOLの指標であるSUBI（主観的健康度、WHO基準）を用いて高齢者の健康状態を評定した。記述が困難な高齢者に関しては、施設職員により聞き取り、記述をしてもらった。

○保護者の交流活動評価に関する調査

8つの交流活動（歌、手遊び、風船パレー、粘土遊び、お手玉、ロープ遊び、七夕の笹飾り、楽器遊び）について、A「家庭で話題になったかどうか」、さらに話題になった活動について、B「幼児がどのような印象を持っていたか」を質問紙により調査した。また、交流活動がお子さんにとってよいと思うこと、悪いと思うことについて自由記述で尋ねた。

結果と考察

i) 観察～プログラム試案

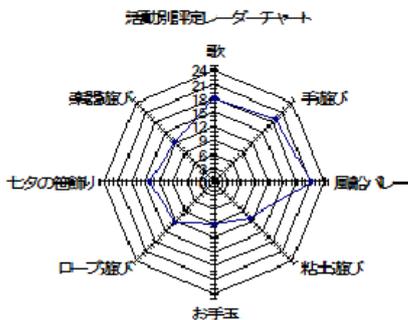
3年間を通じて幼児では、職員に促されなくても進んで高齢者の方へ近寄っており、視線を合わせて話をしている姿が見られた。また、一緒に手を繋いで歩く場面では「ゆっくりでいいんよ。自分(おばあちゃんの)のペースでいいんよ。」などと高齢者に声をかけている幼児の姿も見られ、高齢者の身体の状態を把握している様子が窺えた。

高齢者では、幼児への働きかけが積極的であることが印象的であった。また、表情が明るく、発話の回数が多いことが昨年と比べ特徴的であった。

また、施設職員の方からは、現在の活動に意義が見出しにくく、達成感や満足感が得られにくいという話しが聞かれた。さらに、高齢者の方の自尊感情を高めるには？や、施設間

の連携の困難さや目的の違いから、「一緒に」という意識を持ちにくいと言う話もあった。以下の観点を踏まえ、プログラム試案として、高齢者に向け、日常動作訓練的な身体運動を取り入れた活動を取り入れること、高齢者（もしくは、介護施設の職員）が活動を主導すること、次の「活動」に向けた準備をそれぞれであることを提案した。それらの活動を実施してもらい、先述した調査方法を基に評定した。

ii) 交流活動評価に関する調査
 交流活動に関する質問Aについて、①子どもから話題にした(3点)、②保護者が話題にした(1点)、③話題にならなかった(0点)で得点化した。結果を以下に示す。



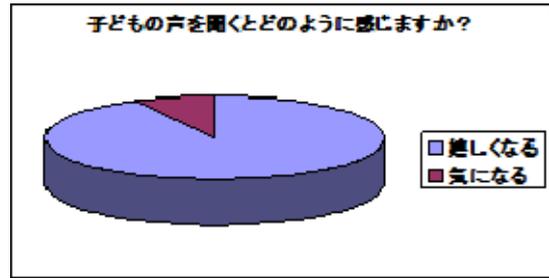
得点化した結果、歌、手遊び、風船パレーの得点が突出して大きかった。一方で、粘土遊び、お手玉の得点が低かった。全体的には、今年度は馴染みのある活動、交流のレベルが高い活動の得点が上がっており、幼児が高齢者との交流を楽しんでいることが示唆された。活動が話題に上がった場合には、お手玉、ロープ遊びを除き、4点以上と高い評定を得られており、活動を楽しんだ様子が話されていることが見受けられる。また、保護者の自由記述からは以下のような意見が聞かれた。

- 保護者の意見から(自由記述)**
- 誰にでも優しく親切な心が育つこと
 - やさしい、思いやりが持てる
 - 保育所や学校へ行くようになると、交流する機会が減ってしまいがちなので、活動することは良いことだと思う。
 - 昔の時代の遊びなどを教えてもらえること
 - 大きくなって結婚した時に、舅、姑関係がうまくいくと思う。高齢者を大切にできると思う。
 - 祖父母以外と接する事で学ぶこともあるし、優しい気持ちや思いやりができると思う

以上から、昨年度の結果に比べ、交流活動が家庭で話題に上ることが少なくなっているものの、交流活動の回数が昨年より多くなっていることから、子どもにとって高齢者との交流が日常のこととして定着してきたととらえることができる。また、保護者のアン

ケート結果からは、交流レベルの高い活動が家庭での話題になりやすいことが明らかになった。保護者の自由記述には、今後の活動についてクッキング、遠足などの意見が寄せられており、世代間交流活動の内容については、今後、幼児、高齢者にとって交流レベルの高い活動を配慮して考える必要がある。

iii) 高齢者に関する調査結果
 主観的健康度は、心の健康度と心の疲労度から構成されており、調査用紙の手順に沿って評定した。以下に、下蒲刈複合福祉施設に通所する高齢者の結果を示す。



心の健康度とは、人間関係や生活空間、必要なサポート等が良好な状態であるかどうかを表したものであり、心の疲労度とは、精神的・肉体的な疲労の度合いを表したものである。

下蒲刈複合福祉施設に通所する高齢者は、心の健康度に関しては40.6と、ほぼ平均値(42)と同じという結果となった。これは周囲の施設職員たちや子どもたちと安定した関係が形成されていることを裏付けるものであると考えられる。毎日の生活にある程度満足している結果であり、これは、施設職員や子どもたちとの交流活動で、自己肯定感が高まり自分に自信をもって生活できていると考えられる。

一方、心の疲労度に関しては39.4と、平均(48)と比較して、やや高い数値となった。心身に少し疲れが見られるが、プログラムに日常動作訓練的な内容を取り入れたりと、交流頻度が増えたことによるものと考えられる。心身に疲れの傾向が見られるが、日常動作訓練等の必要な疲労もあるため、それを踏まえて、交流活動プログラムの頻度や程度について考慮する必要があると考えられる。昨年度と比較すると、心の健康度では、昨年度より良い結果であった。しかし、心の疲労度では残念ながらポイントの減少が見られた。これは、交流活動の質・量共に良いものとなってきて、満足している反面、ちょっと疲れが溜まっている状態と考えることができるだろう。とはいえ、以下に示すアンケート結果が示すとおり、下蒲刈複合福祉施設の高齢者の方は、幼児との交流活動に肯定的な感情を持っているといえ、プログラムの充実

により、以上の課題は克服可能であると考えられる。

IV) 観察による分析

観察の中で特によく見られたのは、幼児が高齢者に気軽に語りかける場面であった。下蒲刈複合福祉施設に通所する幼児は、日常的に高齢者と交流する環境にあるためか、地域の高齢者にも普段から気軽に話しかけているという職員の話もあり、その様子が見てとれた。また、折り紙の時などに手先が不自由な高齢者には進んで声をかけ手伝うといった様子も見られた。風船バレー等の競技性の高い活動については、活動に夢中になり高齢者に対する配慮というより、自身が楽しむということに没頭する様も見られた。高齢者側は、そのような姿が子どもらしく映るのか、笑顔で見守っている様子であった。

一方で、高齢者側からは身体的な不自由さもあるせいか、自分の隣にいる子どもに対しても自分から積極的に関わろうとする様子はあまり見られず、子ども達の反応を見ながら活動を共にしているようであった。しかし、表情は柔らかくであり、子どもと共に活動することに対しては、楽しんでいる様が見てとれた。



本研究の結果から、幼児にとって高齢者と関わることは、非常に肯定的に受け止められており、高齢者との日常的な交流は、他者への思いやり、コミュニケーションスキルの発達に寄与していることが示唆された。また、高齢者にとっても幼児との交流は楽しみとなっていることが観察より明らかとなった。世代間交流の結果が主観的健康度に寄与するという仮説は本研究では支持されなかったが、安定的な状態を保っていることから、今後の研究によって検証される可能性も示唆された。

以上のように、これまで世代間交流の効果として取り上げられてこなかった、幼児の日

常的な発話や様子、高齢者の主観的健康度という側面から検討することで、特に幼児側には好影響があることが明らかとなった。高齢者側については、主観的健康度という指標による世代間交流の効果の検討という点については、今後の効果評価の指標として示唆を与えうるものであるだろうが、本研究では世代間交流による好影響は確認できなかった。この点については、ほとんどの活動が幼児側が主導をとる活動であったため、高齢者の主体性を引き出すことができず、積極的な効果を確認することができなかったと考えられる。

ともあれ、今後進行していくと予想される我が国の少子高齢社会において、幼児と高齢者の日常的な交流環境の有効性については明らかとなった。

今後の課題

本研究の結果で、世代間交流による高齢者の主観的健康度への好影響が確認されなかったことについて、高齢者側が主導をとる交流活動について検討する必要がある。さらに、交流活動を行っていない幼児と高齢者との比較も今後の課題として取り組む必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計3件)

① 七木田 敦・上村真生 幼老複合施設における高齢者と幼児の世代間交流に関する研究第64回 日本保育学会、2012年5月4日、東京家政大学、351-353

② 七木田 敦・富田雅子・岡花祈一郎 世羅町における高校生・大学生の子育て意識の醸成を目的とした協働活動(1)、第63回 日本保育学会、2011年5月21日、玉川大学、356-358

③ 富田雅子・七木田 敦・飯野祐樹 世羅町における高校生・大学生の子育て意識の醸成を目的とした協働活動(2)、第63回 日本保育学会、2011年5月21日、玉川大学、359-361

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.canterbury.ac.nz/Spark/Project.aspx?projectid=137>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

七木田 敦 (NANAKIDA ATSUSHI)
広島大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：60252821

(2) 研究分担者

今川 真治 (IMAGAWA SHINJI)
広島大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号：00211756

若林紀乃 (WAKABAYASHI SUMINO)
広島文化学園大学・学芸学部・准教授
研究者番号：70435056

七木田 方美 (NANAKIDA MASAMI)
比治山大学短期大学部・幼児教育学科・
准教授
研究者番号：80413532

(3) 連携研究者

()
研究者番号：